

お春

東京女子高等師範學校教授 岡田美津

五 お春の味方

小山の上の學校では、お春にとつて得意の場面もあり、又心遣ひな折もあつたが、兎に角お春は、學校や友達を面白く思ひ、それに氣を取られてゐたから、仕合せであつた。さもなかつたら、河崎村での最初の一ト夏は、此兒には、辛いものであつたらうから。

お春は、おみね伯母さんを好きにならうと骨を折つたが、これはもう、大失敗に終つてしまつた。この兒は、缺點だらけな、極く人間ほい兒で、「家庭の天使」にならうなと夢にも考へなかつたが、それでも、義務の念があつて、世間並の善良な少女でゐたいと思つてゐた。であるから、自分で定めた標準に達しない時は、いつも情ないと思つた。伯母さんの家に居て、食べさせてもらひ、着せてもらひ、學校へ遣つてもらつてゐながら、始終伯母さんを心から嫌ひなのが、いやであつた。お春は、この心持を、何かは知らず、濟まない劣卑な事だと思つた。そして、後悔の念が盛んに起こつた時は、氣づかしい、怖い伯母さんの機嫌を取るやうに必死に努めた。併し、この兒は、殆ど伯母の傍に居た事がないのだから、折角のその志も通じる譯がなかつた。伯母の探るやうな眼、邪慳な聲、堅い節くれ立つた指、一の字に結んだ唇、長い無言、自分の髪と色の適はない入毛の前髪……何一つお春の心を惹くものが無かつた。

伯母の方でも、またお春を見るたびに、苛々したのはいふまでもなかつた。この兒は、自分の室に行くのに近いので、きつみ表階段を登るし、柄杓を手桶の上に掛けるのを忘れて、臺所の棚の上に置いた。腰を掛ける時には、猫のための椅子に掛けるし、使に行くのは悦んで行くけれど、何を買ひに出たのだから忘れてしまつた。網戸を開け放しにして置いて、蠅を屋内に入れるし、一ト時だつて黙つて居る折がなく、何かしながら歌を唱ふか、口笛を吹くかした。そして花を玩弄するのが好きで、花瓶に挿したり、着物にピンで止めたり、帽子に飾つたりした。つまり、この兒はその父親……あの取柄のない父親をつくりなのであつた。一體お春の父親の一家は他國のもので、この河崎の生れでは無かつた。おみねに言はせるに、この村以外で多数、人が生れるのは自然で仕方がないが、他國のものに縁なものはないのであつた。

「だから、お花が来てくれたらよかつたに……お花は母親の一家の氣象を受けてゐるから。何か話しかけられなければ物を言はぬ内氣な兒で、お春のやうにいつもくく口を出したりしない。お花は編物が好きだし、十四の時に、もう教會へ入つたりしたから、きつと模範少女になつたらうに……こんな黒髪の大目玉の女兒が此家に来るとは！」

お春にきつて、およね伯母さんの居てくれた事は、まづ地獄で佛の格であつた。この熱情的の少女が、この家に來たこの辛かつた頃に、靜な聲の、よく察してくれる眼付の、きつみ肩を持つてくれる、およね伯母さんは實際有り難いものであつた。

お春は、針仕事を持出して、臺所で、およね伯母さんの傍に居た。おみね伯母さんは、居間の窓際で戸外の見える位地を占めて居た。時によると、家内中横手の縁に出て縫物をするこゝもあつた。そこには、風車草や忍冬が、からみ付いてゐて日蔭が出來てゐた。お春は、手にしてゐる茶色の縮木綿の切を長くく限がないと思つた。それを縫ふこゝの骨の折れることつたら、糸が切れたり、指抜が「うつき」の茂みに落ちたり、針が指に刺さつたり、額から汗が流れたりした。それでゐて縮と縮が適はなかつたり、縫つたところ縮くれたりした。針を磨きへらす程磨いて、毒形の金剛砂の袋の中

へ無上に通すけれど、やつぱり軋んで仕方がなかつた。それでも、およね伯母さんが、根よく世話を焼いてくれるので、お春の指先も、幾分利くやうになつて来た。この兒の指は、鉛筆や、繪筆や、ペンをあんなに上手に使ふのに、もの縫ふ針にかけては誠に不器用なのであつた。

その茶色の着物が始めて縫ひ上つた時に、お春は丁度いゝ折だと思つて、おみね伯母さんに「この次のは異つた色のにしてもよいかと訊ねた。伯母は、語短かに、

「茶色の一纏めに買ったのだよ。もう二枚分あれから取れる。かけがへの袖や、襟ぎや、足前の切も取れるから得だ。」

「それはさうだけれぎ、店の人が取換へてもいゝて言ひましたよ。同じ價で、桃色のミ、藍色のミをやるつて。」

「お前尋いたのかい。」

「えゝ。」

「餘計な事を！」

「金子しまさんが前掛を買ふので柄を選んで上げてたんです。私の勝手な色にしても、伯母さんは何とも仰しやないかと思つたから。桃色でも、茶色位汚れが見えないんです。洗濯しても、色が褪めないつて店の人が言つてました。」

「ブンあそこの店の人は、洗濯の大先生だからね！ 子供は、派出々々しく飾り立てるのはよくない。だが、およね伯母さんは何と言ふかね。」

およねは答へた。

「一つは桃色にして、一つは藍色にしてやつてもいゝでせう。子供は同じ色のを縫ふに倦きるものだから、色を變へたがるのは無理ありませんよ。それに、年中同じ茶色で白前掛では、貧民學校の兒みたやうでせう。……でまた茶はこの

兒にちつとも似合はないんで。」

「見目より心」といふ事がある！ お春は容色かうしきで身を誤るあやまるこゝちはない、その點は確だ。だから「見てくれ」がさうのかうの御機嫌を取つてやるこゝちはない。もう今つからお洒落しやれでしやうがないんだ……自慢する材料たねもないくぜに。」

「年がいかないから、派出なものの心が惹かれるんですよ。私だつてこの位の年頃には覺えがある。」

「お前は、お春位の年頃には、随分馬鹿だつたもの。」

「ええ。私、それを有難いと思つてゐます。もう少しあの馬鹿さを残して置く工夫をすればよかつた思ふんです……年を取つた時の楽しみにね。」

やつまあ桃色ももいろの話が定ままて、その着物が仕立て上つた。

そしておよね伯母さんは、思ひもかけぬ事でお春はるを喜よろこばせてくれた。細い、白の麻あしチープを山型に折るまこゝみを教へてくれて、それを衿や袖口にかよりつけて縁飾りにしろしろいふのだつた。

「お前に丁度いゝ御細工仕事だよ。冬の夜長に、本ばかり讀んでゐるこゝ、おみね伯母さんの氣に入らないからね。さ、この白チープを二列にその桃色の着物の裾に假縫で綴つり付けて御らん。碁盤目通りにまつ直ぐによ。伯母さんが、山型の飾を袖そでと胸むねのこゝろに附けて上げるから。すると、これは上から三番目のよい着物になるね。」

お春は嬉うれしくて堪たまらなかつた。

「私、とつこゝ假縫してしまふわ。裾のまはりを縁縫ゆかりしたから經驗けんがあるけれど、一廻りの長い事百丈位あるわ。でも飾りを縫ぬひけるのなら、此家から富田町まで位、長さがあつても構かまはない。あのね……おみね伯母さんが、私を幸兵衛しやうべゑ小父おぢさんと一所に富田町へやつて下さるでせうか。小父さんが、行かないかつて再また訊いたのよ。一度の土曜日は、莓いちごを摘とまなくちやならなかつたし、その次の土曜には、雨が降つたし。伯母さんは、私を行かせたくないのかもしれない。

……一寸伯母さん、もう四時二十九分よ（四時半からお春は遊べるのだつた）鳥飼きよさんが、先刻から、「すぐり」の木の下で私を待つてるわ。もう遊びにいつてもいゝでせう。」

「あ、いゝよ。納屋の裏からいそいで馳けておいで。おみね伯母さんに音が聞こえないやうに。オヤ、下山の鈴ちやんだの、双生兒だの、金子しまさんが塀のかけに隠れてゐるね。」

お春は縁を跳び下りて「すぐり」の下から鳥飼きよを引出し、それから複雑まじた合圖をして、金子しまだけを下山の一まきから離れさせ、さうく下山兄妹をまいてしまつた。下山の子供達は、年が行かなくて、今これからしやうと企んでゐる遊あそびに邪魔なのだつた。が、この子供達の家の前庭は、村中で一番よい遊び場だつたから、無下にこの子供達を侮蔑し去るわけに行かなかつた。この家の前庭には、古櫓、熊手、大櫓、長椅子、寢臺などがさまじくの破損の程度で、難然なんぜんと置き並べてあり、しかも、それが二日と續けて同じ状態であるなかつた。下山のおかみさんは、殆ど宅に居ないし、よしや居いるところで、前庭で誰が何をやつてゐやうと無關心である。

子供達の好きな遊びは、この家を城に見立て、この城の中に立て籠もつてゐる小數の米軍を、敵兵が包圍攻撃する事であつた。誰もが米軍を勝たせなくてはならないと決定きまつてゐるので、役割を定めるのに中々注意が要いつた。下山シーソーは大抵いつも敵軍の司令長官だつた。が、實に、たよりない司令官で、その矛盾した號令と、後陣に控へてゐる、が好きなとで、彼の下にゐるとんな隊たいでもに、大敗をさらせるのに妙を得てゐた。時には、この家が丸木小屋になつて、豪勇な移民が、攻め寄せる土人を撃退したり、土人に虐殺されたりした。その途、かういふ遊びのあきは下山の家は、手もつけられぬ亂脈らんまさになるのだつた。

子供達にまつて下山のうちの次に好都合の活動の場所は、「秘密の地」といふところだつた。それは、おみねの所有の草地で、小高いところや、凹地くぼ地ちやら、また青々として飯い事をことするのにいゝ平地のあるところだつた。丁度一叢むらの樹がいゝ工

合に蔭を作つてくれ、また他からは見えぬやうにしてくれてゐた。

今日は、こゝで、高い正方形の家を建て、お春がその中に入ることになつてゐた。お春のシャロテ、コルデ（フランス大革命の時マラを暗殺して死刑になつた婦人）が獄屋の格子に倚りかゝつて居るのだつた。

お春は、金子しまの前掛を頭に巻き附けて、牢の中に居た。その氣持は何ともいへなかつた。格子に頭をもたらせてゐると、格子が冷たい鐵の棒になつた氣がして來た。そしてその眼も、近藤お春でなく、シャロテ・ヨルデの悲痛の心を映し出してゐるやうに思はれた。

「うまく、出來たのね。」

金子しまは鳥飼きよは、自分達二人でこの獄屋を作つたので、その手際を遠慮なく賞めるのだつた。

「これ破壊したくないのね。随分骨が折れたのですもの。」とおきよがいつた。

「石をすこし動かして、上に二段だけ除れば私、跨いで出るから」とシャロテ・コルデが案を出した。「そして、あとをその儘にして置けば、明日あなた達が、牢へ入つて「塔の二皇子」になれるわ。私殺して上げるから。」

「皇子つて？ 塔つて何？ その話をして頂戴。」とおきよも、おしまも、せわしく尋ねた。

「今はいけない。御夕飯ですもの。」お春は、これで中々、嚴重な、規律家だつた。

「あなたに殺されるのは本望よ。」金子しまは、どこまでも忠實に答へた。「たゞあなた殺す時本氣になるけれど……」
下山の双生兒を皇子にしてもいいのね。」

「殺される時に、大聲を出したりしていけないわ」とおきよが反對した。「あの連中は遊ぶ時に、ほんみに下らないんだもの。それに、この場所を教へるに、始終こゝへやつて來るは。そしてあそこの家の御父さんみたやうに、何か盗るかもしれない。」

お春は答へた。

「親がものを盗んだつて、あの子達が盗むときまりやしない。あなたね、私の親友でゐたけりや、そんな事をあの子達の前で言つちやいけないのよ。私の母さんがね、その人の前でその家の人達の悪口を決して言つてはいけないつて仰しやつたわ。それや、辛いものだつて。その人の咎でもないので、恥をかゝせるのはごく悪い事よ。」

六 桃 色

ある金曜日に、山の上の學校に、學藝會があつた。金曜日の午後は大抵、對話、唱歌、暗誦などをする日と定まつてゐたが、兒童が心から樂しみ悦ぶ日ではなかつた。兒童達は、詩の暗誦をするのを厭がつた。それを覺える勞をいさひ、中途で支へるのを氣遣ひ恐れてゐた。寺岡先生は、その日歸宅する頃には、頭痛がして、歸へつてから、時によるミ、夜まで床に就いてゐた。參觀に來た女親なごは、子供がおきまりに、支へたり、口訖つたりするのを、額に冷汗を流しく、正面の席で聽いてゐるのだつた。どうかするミ、絶句してしまつた幼児が、ワツミ泣き出して、母親の膝に抱き付くミ、母親が戸外へ連れていつて、賺かすか叱るかした。兎に角、一人がやり損ふミ、一層怖氣がついて一同の元氣が減るのだつた。

ところがお春が來てから、この會に新な氣分が出來た。お春の御かけて下山の双生兒がこんどの會に三節ほどの詩を、可笑味をつけて暗誦し了せるやうになり、當人達も、寺岡先生も、他のものも、みな大悦びをした。それから、舌たらずの鈴ちゃんは、舌だらずの兒が何かいふやうに出來てる詩をすることに、お春が定めてやり、お春自身と金子しまは、對話をするこいふ事にした。お春と一所にするこいふ嬉しさが、おしまの元氣を唆つて、彼女にも自信が出來た。寺岡先生は、こんどの學藝會は、非常に面白いから、村のお醫者の奥さんミ、牧師様の奥さんと、學務掛を二人と、兒童の母親を四五

人招待した、その朝、全校に知らせた。それで、準備をして、金子精一とお春まで、二つある黒板を一つく裝飾するやうにと言付けた。精一は、學校一の畫家だったので、黒板に北アメリカの地圖をかいた。お春は、もすこし寫眞的でないものを畫きたいと思つて、見されてゐる全校生徒の眼の前で、手早く、米國の國旗を畫き上げた。……赤と白と青のチヨークで、星も條もそれく誤りなく畫いた。そして、クニョンの入れてある巻烟草の函の蓋から模寫して、國旗の側にコロンブスの姿を畫いた。

寺岡先生は、感心してしまつて、

「皆さん、春さんがこんな立派な畫をかいたのですから、拍手しやうぢやありませんか。この畫は、學校の誇りです！」
一同は、意氣込んで拍手した。そして賀田林三は、手を振つて、盛に萬歳を唱へた。

お春は、嬉しさに胸が躍つて、涙が眼に出て來て、極まりが悪くなつてしまつた。自分の席に戻る途さへよく見えなかつた。可愛想にこの兒の淋しい、つまらぬ生活で、今のこの感激すべき刹那のやうに、人から推されて、賞められ、報いられた事はなかつたのである。義侠な行ひが義侠な行を誘ひ出すやうに、熱心は熱心を生み、機智才略は、また、機智才略を呼んだ。烏飼きよは、全校が國旗の歌を唱つて折返のところで、お春の畫を指さす事にしやうこの案を出した。賀田林三は、精一とお春に、それく自分の畫に署名させて、來賓に誰が畫いたが分るやうにしやうと言つた。目黒ひさは、壁の大孔を青葉で埋めて、水桶に、野の花を一杯活けたいが宜しいか尋ねた。お春の心は、そんな實際の細かい事柄を離れて、たゞ恍惚として黙つて居た。心が感激に充ちくつて、對話の文句も忘れさうになつてゐた。

休み時間に、お春は心中大得意なのだつたが、謹慎やかに振舞つた。そして皆が打解けた氣分で居た爲、かねてお春の仲の悪かつた住野みんまでが、お春の指圖の下に、青葉の枝を集めて、汚いストープを被ひ飾つたりした。

寺岡先生は、十一時四十五分に課業を止めて、家の近いものは、着物を着換へて來られるやうにした。お春もおしまは

只、もう氣が立つてゐるので、階段スライの處で息をついただけ、あとは、ひた走りに走つて家に歸つた。

「あなたのミこの伯母さんは、あなたに、一番よい着物を被せて下さるでせうか。それとも、黄色のキャラコのおあれでせうか。」とおしまが尋ねた。

「およね伯母さんに尋いて見るわ。」ミお春が答へた。「おの桃色のが出来上つてゐるといふんだけれぎ！ 私が今朝、お家を出る時、拍母さんが、ボタン孔をかゞつてゐたのよ。」

「私はね、母さんに石榴石の指輪を貸してもらふつもり。國旗を指さす時に日があつてキラツと光ると、きれいだわね。……さよなら。學校へ歸る時に、私を待たないで頂戴。私乗つてくかも知れないから。」

お春は歸つて見ると、横手の戸に締りがしてあつた。が、鍵は、段々の下に入つてゐるきままつてゐた。河崎村ではみんな、そうするのだつた。お春は、戸を明けて、茶の間へ行つて見るに、食卓の上に御飯の支度がしてあつて、およね伯母の置手紙に、伯母達は、鳥飼の御かみさんと宮本村へ出掛けたミ書いてあつた。

お春は、バタのついたバンを一片頬張つて、表階段を、自分の室へといつた。寢臺の上に、およね伯母さんが、優しくも仕上げて置いてくれた桃色ギンガムの着物が載つてゐた。許可ゆるしを得ないで之を着て、いふもんだらうか。おもひ切つて着やうか。今日の會は、新しい着物を着てもよい程のだらうか。それとも、伯母達は、この着物は、音楽會の時のに取つて置けといふだらうか。

「着て行かう。伯母さん達が居ないんだから尋く事が出来ないけれど。きつと何ミも思ひなさらないわ。たかゞ縞木綿だもの。新しく飾りがついてゐる。そして桃色だからこそで、さまなけれや、立派な事ありやしない。」ミお春は考へた。

彼女は、髪を解いて、波立つ毛を櫛でミかし、リボンで結んだ。それから、靴を穿きかへ、美しい着物を首からかぶつ

た。獨りて、さうやらボタンをかけたが、春中の中央の三つだけは、おしまに掛けてもらふ積りにした。

こんざは、お春の眼が、大事のく桃色の日傘に移つた。着物の色がよく適ふし、それに友達にまだ見せた事がない品だつた。學校へ持つて行くには相應しくなかつたが、教場まで持ち込まなくてもいい。紙にくるんで置いて一寸他に見せて、歸りがけに翳して來よう。彼女は階下へ行つて、客間の姿見で見た。映つたその姿に我ながらハツとしてしまつた。およそ着物さしてこの、何さといへぬ桃色ギンガム以上の美しいものがあらうか！ お春は、薔薇色の着物の素ばらしい美さに氣をさらされて、自分の眼の輝き、頬の冴えた色、垂れた髪のかきめきなどには、一向心付かなかつたのである。まあーもう一時に二十分しかない、遅くなりさうだ。横手の戸から踊り出て、門の側の薔薇の木から、一輪桃色の花をとつて、學校まで七八町の距離を、忽ちのうちに、行つてしまつた。了度學校の入口のところで、これも息をきらした、きらびやかに耕つた金子しまに出遇つた。

「まあ、春さん！ 繪にかいたやうに奇麗よ。」とおしまが叫んだ。

「私が？」とお春は笑つて「うそよ！ たゞ桃色ギンガムの御かけよ。」

「あなたは、平常奇麗ぢやないけれど。」とおしまはなほも續けて「でも普通さはちがふのよ。……この柘榴石の指輪を御覽なさい。母さんが石鹼水で洗つて下すつたの。まあ、あなたの伯母さんがよく新しい着物を被せて下すつたのね。」

「伯母さん達二人さも留守だつたから、私尋かなかつたの。」とお春は氣掛かりらしく答へた。「不可ないつて言ふと思つて？」

「おみね小母さんは、何でも不可つていふんでせう。」とおしまが尋ねた。

「えー。でも、今日は特別の會ですもの日曜學校の音楽會程の日よ。」

「え、それや、そうね。」とおしまが同意した「黒板に、あなたの名が書いてあるし、あなたの旗を皆で指さすんだし、

「二人の對話や何かもあつてね。」

この日の學藝會は、これもく／＼上出來で關係者一同が大満足をした。やり損つた者もなし、泣いた者もなし、恥かしい思ひをする親もなかつた。寺岡先生は、自分の技倆に對する賞讃の聲をきいたが、その賞讃は自分が受けていゝのか、すくなくとも半分はお春のではないかと思つた。お春は、他の兒童以上に澤山仕事をしたわけではないが、さういふものか目に立つのであつた。村での催し事の折にも、お春をかけに引込ませて置くわけにいかなかつた。この兒を大嫌ひなもので、この兒が出しやばりださいふ事は出來なかつた。たゞこの兒は何でも即座によるこんでして、ちつとも含差はらまかつたのである。自分を見せびらかす機會を求めるところでなく、自分といふものには驚くほど無頓着で、一生懸命、他を前へ出さうとするのであつた。

會がやつと終つた。ぶらく／＼歸りながら、お春は、もう落付いた、靜かな氣持に戻れないやうな氣がした。今夜は、課業の復習はしなくてもよいし、明日ジャムを拵へるのを手傳ふのだと思つても、それが厭でなかつた。彼女の精神の中に光明が漲みなぎつてゐて、恐怖の念など生存する餘地がなかつた。空には濃い雲が叢むらがりて出て來たが、傘がさせて嬉しいと思ふ外に、彼女は氣にも留めなかつた。彼女は、大地を歩いてゐるのも、人間界にゐるのださいふ事も忘れてゐたが、煉瓦の家の、横庭に入つて、おみね伯母さんが、入口にゐるのを見た時、突然此世に戻つて來た。

七 濁れた薔薇

おみねは、およねに對つて、

「やつと歸つて來た……一時間も遅くれて、もう少し遅からうもんなら、夕立に遇ふのに。彼女は先の事なんか考へないんだから。そして、まあ、いろんな悪い事をした上に如何どうだらう。あの新しい着物を着飾つてさ、父親の舞蹈學校式の足

取りで、まるで演劇しほでもしてるやうに日傘をふりまはしてやつて来たよ。いゝかい。およね、私やお前より年上だから、私がお存分言ふんだから、もしそれが厭いやなら、小言がすむまで臺所たいしよにいておいで。こゝへおいでお春。話してきかせる事がある。あたり前の學校の日に、何だつて許可きょかを受けないで、よい新しい着物を着たのだへ。」

「御晝の時に、きくつもりだつたんですけれど、伯母さんは宅にいらつしやらなかつたから、きけなかつたんです。」

「そんな積りはなかつたんだらう。誰も居なかつたもんだから、着たんだ。……伯母さんが着せないのはよく承知して居ながら。」

「伯母さんが着せないは判然私に分つて居れば、私、着やしませんよ。」とお春は、作り事を言ふまいと努めて「でも私、判然はつき分らなかつたし、思ひ切つて着てもいゝ程の事があつたんです。今日は、學校で、ほんこの展覽會てんげんかいもいつてもいゝ位のがあつたので、伯母さんが可いと思つたんです。」

「展覽會だ！」とおみねは、馬鹿にしたやうに怒鳴つた。「お前だけでも大した展覽會だ。その日傘も展覽てんげんさしたのかへ。」

「日傘は、馬鹿ばかけてゐたの。」とお春は垂首しなして白狀した。

「でも生れて始めてこの傘かさの色のよく合ふものが出来たんでね、桃色の着物と一所にするは大變奇麗きれいなんですもの。おしまさん私わたしで「都會の娘と田舎娘」つていふ對話をしたんですよ。そして、私家を出かける途端とたんに、この傘は、都會の娘に丁度いゝと思ひ付いたんです。やつぱり丁度よかつたわ。伯母さん、私この着物をよごしませんでしたよ。」

「何が悪いつてお前の袂たもとの裏表のある遣り方位悪いのはありやしない。」とおみねは冷やかに言つた。

「それにお前のした他の事は如何いかだい。まるで魔まに取つかれたやうだ。表階段せつたいからお前の室へいつたらう。隠かくさうたつて隠せるもんか、中途にハンケチを落して去つたんだもの。そしてお前の室の窓の網戸を明け放しにして置くから、蠅はが内中に入つて来たわね。御飯を食べればつて跡片付けをするぢやなし、御皿一つ仕舞ひはしない、おまけに十二時半

から三時まで横手の戸を締りもしないで置くんだもの、いくらでも人が入つて何か持つてゆかれる！」

お春は、自分の罪の数々を聞きながら、ドカミ腰を掛けてしまった。さうして、自分は、かう投げやりなんだらう？
言譯のたゝない罪を、言譯しやうとするうちに涙が出て来てしまつた。口訖りながらお春は言つた。

「私、悪うございました。學校の裝飾をし、居て遅くなつたものだから、走けて歸つて來たのです。そして一人で着物を被るのに骨が折れて、御飯を一口しか食べる暇がなかつたの。そして一番あみで、跡片付をして戸締りをしやうと、ほんまにく／＼思ひかけた時に、時計を見たら、その時すぐ行つても列の中に入れるかさうだか分らない位だつたんで、こんな日に遅刻して、牧師さんの奥さんだの、御醫者さんの奥さんだの、學務掛りの人だのゝ居る處で、黒點をつけられるのは厭だと思つたんですもの。」

「今更泣いだつて騒いだつてしやうがない。濟んじまつた事は仕方がない。後悔先に立にすさ。自分のほんまの家でもない家に居るんだから、成る丈面倒をかけないやうにと心掛けるんぢやなくつて、お前のは、どうしたら、私達を困らせられるかミ一生懸命になつて居るやうだ。着物からその薔薇の花を御取り。汚染が出來てるだらう、御見せ。濡れたピンで鏝だらけの孔が明いてはしないかへ。汚染にはなつてゐない。心掛けがよかつたんじやなくて運が好かつただけだ。花だの、縮らした髪だの、髻飾りだの、氣取つた體裁だのミお前のにやけ父親みたやうなが、伯母さんはもう堪らなく嫌ひだよ。」

お春は、急に首を上げた。

「伯母さん。私は出来るだけこれからよくします。何か言はれたらすぐその通りにします。戸締りも氣を付けます。ですからさうか、お父さんの悪口を言ふのはよして下さい。お父さんは、ほんまにいゝお父さんだつたんです……さうなんです。それをやけ男なんぞ言ふのは卑劣です。」

「生意氣に口答へなんかするな……ひとを卑劣だなんて言つて。お前の親はね、自惚のつよい、御めでたい、意久地な
しだつたのさ。他人は言はれるより、伯母さんの口から聞い方がいゝんだ。お前の母さんの御金を費つてしまつて、七
人子供を押付けて死んでしまつたのだよ。」

「七……七人いい子供を置いてくだけだつて手柄だわ。」お春は泣いた。

「他の人が食べさせたり、着せたり、學校へやつてやるんぢや、あんまり手柄でもないさ。お前、二階へいつて床に入
つておしまい。そして明日の朝まで、そうしているんだよ、パンと牛乳を、鏡臺の上に置くから、明日の朝御飯の時ま
で、物音一つ立てることはならない。……およね！ 走つていつて布巾をお取り込み。物置の戸を閉めて。今に大夕立
がやつてくる。」

「大夕立は今すんだんぢやないの。」およねは姉の命令を果しに出かけながら静にいつた。「姉さん、私はめつたに、私
の考を述べることはいけないけれど、連造さん（お春の父）の事をあんなに言ふのはわるいでせう。あれは、あゝいふ人
だつたんで、別の人になりやうはないんです。ミにかくお春の親で、おあさは優しい良人だつたミ、いつでもいふぢや
ありませんか。」

「フン、死んだ亭主はよい亭主ときまつてゐる！ だが、時々は事實を持ち出して風にあてないミいけない。お春は、
親父から受けついだわるい氣質を捨てゝしまはないうちは、祿なものになりやしない。あれだけ言つてやつて、いゝ事
をしたと思ふ。」

「そうでせうよ。」およねは、年に幾度ミ數へる程珍しく思ひ切つた勇氣を出して「でもね、姉さん、あれは不作法で、
不心得な事でしたよ。」

丁度その時、家を震動させる程の大雷が鳴り轟いたけれども、今のおよねの一言が、おみねの心にグワンとひびいた程

にはおみねは感じなかつた。

お春は、力なく裏階段を登つて、自分の寢室の戸を閉め、愛しい桃色ギンガムの着物を、慄へる手で脱いだ背中の外れにくいボタンに手を伸ばす合間に、木綿のハンケチを堅く丸めて、眼を拭いた……あんな思ひをして着た晴衣に涙がかゝつてはならないので。それからその着物の皺を伸し、矜の白裴る壓し縮めて、憂世の辛さを一しやくり泣いて簞笥の抽出しに納めた。枯れ凋んだ桃色の薔薇の花が床に落ちたのを見て、お春は「嬉しかつた今日の日に似てゐるわ」と、心で思つた。そしてこの薔薇が自分が自分の生活の象徴だと思つて、桃色ギンガム一所に抽出しに仕舞つた。悲しい思出の多い今日の出来事を葬つてしまふ心組で。これが如何にも此兒のこの見らしい所であつた。

お春は、髪をいつもの二つのお下げにし、他所行き靴（幸に伯母さんに見付らずにすんだ）を脱いだ。その間に、この家を出て、自分の實家に歸らうといふ考が熱しかけて來た。實家で、悦んで迎へ入れてはくれまい……そんな期待はないが……でも、自分は、家で、母さんの手助けをして、花姉さんを代りにこゝへよこさう。「姉さんだつて思ひ知るだらう。」とお春は、口惜しまぎれに一寸そんな事を言つて見た。それから窓際へ行つて、山の透りの電光がきらめき、雨の雫が、避雷針を追かけつこをして傳はつて行くのを眺めながら、しきりに思案をしてゐた。「あんなに晴やかに今朝は夜が明けたのに！ 赤々御日様が出たから、窓の闌に倚りかゝつて、學課の復習をして、そして美しい世界だと思つたのだつて。

あの午前中の輝やかしかつた事。きたない何の飾りもない教場を花の家に変へたり、下山の双生兒の暗誦を上手にやらせたので、寺岡先生が喜んで下すつたりしたつけ。それから選ばれて黒板の裝飾をしたり、烟草の箱からコロンブスの繪を畫かうと思ひついたりして、一同が拍手してくれた時の嬉しかつた事！ それから午後つたら！ まづ、金子おしまが「繪みたいに奇麗よ」を賞めてくれたのが始まりで、得意の事ばかり續いたつけ！

お春は、學藝會にあつた事を順々に心の中で繰返して見た……ここに自分をおしまとの對話を。自分の思ひ付きで、青

葉に包まれてるストープを、草の土手のつもりにして、田舎娘がそこに座を占めて、羊の番してゐるやうにしたつけ。その御蔭で、おしまが落付いて、これまでになく上手に暗誦をしだのだった。それに、おしまが石榴石の指輪を貸してくれて、都會の娘が日傘を擴けて、女牧者の近くに來るまきに、その指輪が光つてよからうと言つた。なんまあ、あの女は大氣なのだらう！ おみね伯母さんは、田舎から招びよせた姪が、學校で、よく出來たのだから、喜ばざるかとも思つたのに、これに限らず、何をしても、喜ばざりさうにもない。

明日、幸兵衛小父さんの乗合馬車で、錦ヶ森まで行つて、お安さんの家から、さうかして家へ歸らう、だが、よく考へて見るま、伯母さん達が、さうさせて下さりさうもない。ぢや、いゝわ。今、家を脱け出して、幸兵衛小父さんまここに泊めてもらつて、明日の朝、御飯前に出てしまはう。

お春は、それ以上考へても見なかつた……困つた子で。さつさと一番着古した着物を著、寢衣ま、櫛齒、磨楊枝を一包にし、窓からソウミ出た。この兒の室は、L字の曲り角に當るまころにあつて、窓も地からさう危いほど高くも無かつた。もつこも此時のお春の心持では、いくら高くつたつて思ひ止まる筈はなかつたのだ。が雨樋を掃除するつて屋根へ登つた人が、お春の窓ま裏縁の屋根との中途に、足止りに附けて去つた棧があつた。お春は、茶の間のミシンの音ま、裏所の肉を刻む音まを聞いて、伯母さん達の所在を知り、窓から這ひ出て、避雷針に撞まり、もつてこいの棧のまこまで這つて行き、裏縁の屋根へ出て、忍冬の垣を梯子にして降り、これから先をさうしやうま考へもせず、大雨の中をドン／＼往來を飛ぶやうにして行つた。(以下次號)